九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

九州大学所蔵『延五秘抄』一本について(一)

崎村，弘文
九州大学大学院博士課程

https://doi.org/10.15017/16290

出版情報：文獻探究. 5, pp.44-57, 1979-12-05. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：

九州大学所蔵『延五秘抄』一本について（一）

崎村弘文

九州大学文学部所蔵の『延五秘抄』一本（完本）については、本誌第3号に、「古今和歌集聞書」として、簡単な紹介を行なったことがある。

その際にも指摘しておいた如く、目本は、全篇に亘って夥しい〈読みの注記〉を持ち、また、他の諸本には見られない多くの異文を持つなど、国語史研究・中世歌学史研究の資料として、見落とすことのできない価値を有するものと認められる。

したがって、すみやかにその全容が明らかにされるとともに、詳細な調査の手が加えらるべきこと、云うまでもないが、同本がかなり大部のものである関係上、それを一時に行なうには多くの困難が伴なうものようである。

今回、筆者は、あらためて同本を取り上げる機会にめぐまれたのであるが、右のような事情から、とりあえずその要部のみを紹介することとし、その他の部分の紹介・国語学的見地からの考察等は、全て次回に譲ることとした。

詳しくは、次号を参照して頂きたいと思う。

【声点・濁点・不濁点等の注記　翻字】

【朱筆注記】

○上冊

1オ　やまとうた

9オ　八雲たつの哥に清濁の口傳あり　いつもやへかきをハすミてよむ也下のやへかきニをハにこりてよむ也　すめるハ上て天となり濁ハ地となる理也

10ウ　おほさゝき

11オ　いふかり思て

12オ　王のすさま／しかりける時

14オ　○そのむくさのひとつにハそへうた

14ウ　○ふたつにハかそへうた

15ウ　○みつにハなすらへうた

16オ　これハ物にもなすらへてそれかやうになんあるとやうにいふも　比の注也

なすらへてと声をにこりて君にけさの哥の注也と用る説あり

18オ　○いつゝにはたゝこと哥

18ウ　とめ哥とやいふへからん

20ウ　○いまの世中につきゝ――なりにたり、なりんだりとよむも　まめなるほに

22オ　夜こともに　殊に也

23オ　つくは山　は文字の声清てよむ也此処にかきるとゝ

25ウ　あるハ昨日ハさかへをごりて、

33オ　そとほりひめ

33ウ　六人の失をいふに何の哥を本としていふとならは

34オ　○かゝるにいますへらきの　きの字こゝにてすむへし常ハにこりても云々

34オ　つくは山

36ウ　○それまくら　沓等也　貫之か我等といへる詞也

39ウ　心から花のしたくに　うくひすとのミ　憂く不比の心也

39ウ　くへきほと時へぬるや　とよむる

40ウ　かにはさくら　かはさくらの事也

42ウ　くたに　苦丹　牡丹類也

42ウ　さうひ

43オ 白露を玉にぬくとや
44ウ けにこし 牽牛子也…
45ウ やたへのなさね なさね（朱）片一（朱）
46オ やまじ しといふ草の名也
46オ かはなくさ 三ケ也
46オ さかりこけ かつらのやうなる物にや 苔ハ葛
(46ウ) さかりこけ（朱）片一（朱）
の類なり
47オ さゝまつ ひは ハせをは
ふさゝめに時まつまにそ
48オ あほのつねミ 阿保經覽（「アヲノ」朱）
49ウ 百和香 あハせ薫の事也（「ハクワカウ」朱）
49オ 春かすミなかしかよひち 中ししハやすめ
55オ 字也
しはつ山ふり しはつ山 近江名所云々一説
豊前ノ しはつ山とも ……
57オ まきもくのあなしの山の
57ウ つへとハ にへせ（「ニヘ」朱）
59ウ みのゝ國關のふちかハ
60オ おくろさきミづのこしまの
61オ かひかねをさやにもみしか
62ウ

○中冊

4ウ ・袖ひちて（朱）結ひし水の
5ウ 春霞たてるやいつこ かすミ（朱）片傳（朱）
7ウ 春たてハ花とや見らん
見らんとハみるらん也 ……
8オ ある人のいはく、―― まうちきみ
9ウ みふのたゝみね ふの字すみてよむ也
9ウ まさすみ 當純（ヲサスミ） 近院文德御子能有右大臣男
12オ かすかのゝ（朱）とふひの野もり
17ウ くらふ山にて 物にくらふる方に用る時ハふの
字を濁りたゝよむにハ清といふ說あり
22オ 誰しかもとめて折つる くらふ（朱）片一（朱）スミタリ 顯昭ハ誰然モと注せり
24オ 我やとの花見かてらに
24ウ 亭子院（朱）
26ウ そうく法し 承均（ショウキン）と注せり ……
27ウ 藤原よるかの朝臣
29オ ことならハさかすやハあらぬ
29ウ 春風ハ花のあたりを 花の心つからうつろふなら
32ウ ハ風にうらミもあらしと也 ……
33オ みわ山をしかもかくすか
33ウ 或人云 なけ にこりてよむともなき心なるへしと
33ウ 花のことと世のつねならハ
37ウ 吹風にあつらへつくる 告也（ツゲン）
39ウ 思ふとち春の山へに
43オ うちハふきとハ 郭公／の鳴時羽をひろけぬる躰也
45ウ 郭公なかなくさとの 汝か鳴也
46オ 思いつるときわの山の 紅のふりてとハ …
49ウ 郭公人まつ山に 山にゐて人もとへかしと思ふ
51ウ 比の心なるへし 戀のまさる也 ……
49ウ むかしへや今も戀しき へハやすめ字也
51ウ 秋たつ日うへのをのことも ―― 殿上人ともの
川せうえうのさま面白かるへし
61オ 秋萩にうらひれをれハ とよみ ……
71オ 秋の露色ことに 明也 又異（ゴト）にとよむ說
あり心ハ同にや
71オ 雨ふれと露ももらしを かさとり 笠（カサ）を
取（トル）といふ心にハあらす雨に蓑（ミノ）ハ緣あれハつゝ
けたる也
75ウ ちりぬへみとハ
78オ 秋の月山へさやかに
81ウ 風ふけハおつる紅葉ハ

90ウ 梅の香のふりをける雪に　ことこと　悉せ
95オ 誰かよくわかんとせこと〳〵又ハ清欤云〻
……
99ウ 101ウ 106オ 107オ 107ウ 108ウ 109ウ 109ウ
……
……とすみてよむ説有　當流にハ濁せ　又云おもほえ
離別
いかこのあつゆき　いかこ氏せ
人の花山に〻　夕さりつかた
ことならハ君とまるへく
兼藝（かけ〻ち）
かきくらしことハふらなん
道にあへりける　物をいひつきて　…
したの帯の道ハかた〳〵

○下冊

1ウ 夜ハよもすからおきあかしひるハ又ひねもす思つ〻
かくありても思をもとけずしてむなしくきえ
5ウ 吉野川岩きりとをし
6ウ 我その〻梅のほつえに　はつえ　いつれも用之　はつえ
7オ 御師説君にハ君をの心せ　わかごとや
8ウ いてわれを人なとかめて　見御抄　いてとハ發言（ホッゴン）の
ことハせ　ゆたのたゆた　大海ハゆりたて〻しつまり
かたき物せ　我心中のしつまりかたきさませ　……
9ウ から衣ひも夕くれに　ひもゆふと云ハ衣の縁せ
かへすも縁せ　切なる思なるへし　かへす　かへすそ
11オ 戀しねとするわさならし　ならしとにこりていふ義
あり嫌道せ　……
13オ 心かへする物にもか　物にもかなの心せ　……
14オ 秋の田のほにこそ人を
14ウ あは雪のたまれハかてに　たまれハかつ〳〵くたく

17オ るさませ　……
夢のたゆ〻ちとハ端的せ　夢のうつ〻にてあれかし
とせうつ〻のたのミのたえたる時の心なるへし　又は
たゆ〻ちとにこる説もあり　直路（ちよくろ）とも直字をも
よむと云〻
18ウ わりなくもねてもさめても　戀しきかとハ戀しき
(19オ) 物哉とせ　……
20ウ むしのこと〻ろにたて〻ハ
(20ウ) 秋なれハ山とよむまて
26ウ 雨のそほふりける
30ウ あるしきつ（31オ）けて
32ウ 寵（一説ウツク）　……
33オ 用之
34ウ けさハしもおきけんかたも
君か名も我名もたてし　なにハなるとハミつとい
ハんためせふかく忍心せ
35オ 花すゝきほにいてゝこひハ
35ウ 思ふとちひとり〳〵か　ひとり　ひとりか……
35ウ 夢ちにハあしもやすめす　みしことハ
36オ 思へとも人めつゝミの
36オ 瀧津瀬のはやき心を　人めつゝミ　……
38ウ むら鳥の立にしわか名　ことなしふとも　ことなし
うともといふやうによむへしと〻
41ウ さむしろに衣かたしき　ハしひめ　橋ひめの物かたり
(42オ) なとあり　……
43オ あな戀しいまも見てしか　見てしかなの心せ　…
43オ つの國のなにはおもハす　あふといふ名ハかりすハ
思ハず難にあひみん事をこそ思へとせ
とはに　……
47ウ 忘なんとおもふ心の　ありしより　けに　ありし
よりまさりてせ　……
51ウ いにしへに猶たちかへる　戀しきことに
53ウ 大空ハ戀しき人の物思ふことに

54オ かたみこそ今ハあだなれ　根本ハ仇なるへし
密勘云〜定家卿説あだなれとよむを聞て
仇とをしへん事いひかたしと云々
あだとよみて仇の心をふくむへしと云説あり
爲氏卿ハあだなれとよむのミならず心をもあ
だなる心に用へしと云々
55オ 花すゝき我こそしたに　ほに
57オ 山しろのよとのわかこも
60ウ いまハこしと思物から　またもやまぬ哉の世
65ウ 色みえてうつろふ物ハ　色にみえすしてうつ
ろふ也　……
71ウ 秋風のふきうらかへす
72オ うきなからけぬるあわとも
74ウ ねてもミゆねてもみえたり
80オ 〜ことならはことの葉さへも　かくのことくむなしく成ぬる
84ウ 人ならハとも
90ウ 近院
さゝの葉にふりつむ雪のくたち　さかりハも
91ウ くたちとハかたふくさま也　……
98ウ をしてるやなにはのミつに　三津といふ所あり
99ウ みつとにこりてよむ也　……
100オ 眞せい法し
104ウ 神たい法し　神退
橘のなかもり　長盛ハ直幹ノ父也
世にふれハうさこそまされ　岩のかけ道　かけ道
両説也　陰道ハ面白しと云々　かけ道も可説也
山ふかく入て岩の陰道の人しれぬ処をも分
いらんの心也　かけ道の心ハけハしき道をも
ふミならしてんと也　…
107ウ あまひこのをとつれしとそ
110オ 我を君なにはのうミに　みつの　すみてよむと云々
110ウ この哥ハ　ミつの寺に

117オ 古郷はみしこともあらす
117ウ みちのく　橘のくすなをか女　葛直
122オ もえつゝとはに　たゆる時なく　…
122ウ 〜ふの身なれハ　えんふの身也　…
127ウ なミのしはにや　ひたいの波の心なり　おほゝれんハ
老ハてなん事也
135オ 戀しきがかたも方こそ　か文字清てよむ
(135ウ) 時ハやすめ字也　義
又濁てよむ義あり　いつれも義理ハおなし
136ウ にこりて可然にや云々
(137オ) われおほしてふ　うれハしきこと
裏云田をもるものハ人のたくハへする心に
たとふ　貧窮なる人のたくハへを苦労
するたとへ也
138オ 家傳ことすミてよむ説あり理ハおなし
139ウ 人にあハん月のなきにハ　ハしりひに
142オ 〜ことならハ思ハすとやハ
143ウ なにハなるなからの橋も　つくる也　盡也
まめなれとなにそハよけく　かるかやハミたるゝ
枕言也　よけくとハ　よくる心也
一説よけくよき心也　まめなるハ實なる事也
實なりとみえたる人のさもなき事あり
又實ならすみたれたりとみる人もよく見
れハあしからぬ事あり又云まめなれとさ
もなき人とて何かハよけんとも難定よしも
「まめなれとゝいふうちにさもあらぬ事ある心
こもるにや
あしけく
御師説よけくハよくハなきも
144オ くそ　源つくるか女
御師説　くそ
146オ 身ハすてつ心をたにも　はふらさし　放埒さ

せしせ　はうらとよむ　身をこそ時にあたりてすつるとも心をハ放埒せしせ
146ウ　梅花さきての後の　すき物と　酸よせたり
好色の心なり　……
補 134ウ　いそのかミ古にし戀の　戀のつもりきたり
て身にたゝるやうになりぬるせ
いそねかねつるとハ　をこたりをも申えぬ
心なり　いそねとハ神なんとに身のをこたり
を申事せ　……
142オ　平中興　なかきとよむせ

【墨筆注記】

○上冊

20ウ　（「いまの世中色につきゝ」の注）
（哥）哥の道ハ此國の風俗として代々にたえす殊ニ
持統文武の御時人丸冷泉として此道盛な
(21オ)　りしより以來用きたれるやうハ今の世の
ことくならすといふ心せ　……
24ウ　（「おとこ山のむかしをゝ」の注）
（女）女郎花の一時をくねるとハ　をミなへしを
弄したる心せ　あなかしかまし花も一時とよ
44オ　めるも弄したる心せ　……
りうたんの花　りんたうせ

○中冊

8オ　文屋のやすひて　康秀か哥の躰ハ物を詠する
事たくミにして其躰いやしといへり
(8ウ)　御師説文屋　常ならハ文屋といはんすれともふミをミ
はねニいへはせ文室とも書せいへの心せ
10オ　（「まさすみ」の注。朱筆10オ参照）
御師説　近院ハ呉音せキンハ漢音せ
……
私まさすみ　有能ノ子せ　文德の孫せ

40オ　（「思ふ上ち春の山へに」の注）
御師説はてのかもしにこるせがなの心せ
50ウ　（「はちす葉のにこりにしまぬ」の注）
……
あさむくとハ愛し弄する心せ　御坊にい
つはりはかる云々
御師説人をたぶらかす心せ
57オ　秋のよの月の光し　月如晝といへるやうなる
夜のさまなるへし　くらふの山に對していふにハ
あらす　御師説　くらふ　すむせ
79ウ　（「わかきつるかたもしられす」の注）
御師説　くらぶ山
85オ　（「たつた川にしきをりかく」の注）
御師説物而前書ト云ハあしき せ詞書と云へ
し但ませていひて可然せ
89ウ　けぬかうへに又もふりしけ　明せ　春霞た
ちなはなとのわたり殊ニ優せ云々
御師説　ふりしけ　ふりつけせ　しくニ
却のをも書又鋪の字も書せ
90ウ (90オ)　（「梅の春のふりをける雪に」の注。朱筆90ウ参照）
御師説　此の文字かにかよふ君か代の類せ
91オ　（「あら玉のとしのをはりに」の注）
御師説つゝの字よくたちたり　なるこに
91ウ　（「雪ふりて年のくれぬる」の注）
御師説　我身ニ觀してせわかミ不變ニへん
くトくらすをせ　……
92ウ　（「わたつうミの濱のまさこを」の注）
御師説　千とせハかきりもなき心にこゝにてハ用
て可然とせわたつうみハ四海を君子ノおさめ
93オ　給ふによそへてせ
（「しほの山さしての磯に」の注）
御師説　八千代となくハ萬世ヲよハふ心せ

93ウ　此やちよハ千世也　さして

（「わかよハひ君かやちよに」の注）

御師説わかよハひといひて　思ひ出にせよと

下知していかゝ但よハひよくきけなとゝ

下知なるへしわかよハひトよびかけてせ

○下冊

8ウ（「いてわれを人なとかめて」の注。朱筆8ウ参照）

御師説いてわれを　いてさらハなと云心せ

ゆだのたゆだ　たゆたふせ　ゆだハゆりせゆらるゝせ

たゆたハたゆたふせ

12オ（「おきへにもよらぬ玉もの」の注）

御師説おきべにも　沖のほとりせ

12オ（「あしかものさハく入江の」の注）

……

又云しらすや人をとハ　……

……

御師説　しらすやハ　あちかしらすやせ又しらなんだの心せ

12ウとふ鳥のこゑもきこえぬ　深山幽谷のたとへせ　…

13オ心かへする物にもか　物にもかなの心せ　人の心を我心になし

我心を人にかへてみせハやとせ

御師説心がへ　物にもがハ哉せかをすむ説いかゝ我と人ト

14ウの心かへせかたおもひなれハくるしきとせ

（「あは雪のたまれハかてに　やかてに」の注）

御師説　がてにハ　やかてせ

16ウ（「しもついつも寺に」の注）

御師説　しもついづも寺

20オ（「いつはりの涙なりせハ」の注）

御師説　しぼら

22ウ（「やよひはかりに物のたうひける」の注）

私物のたうぴ　の給せ

23オ（「冬川のうへにハこほれる」の注）

34オ御師説　冬川

（「かきくらす心のやミに」の注）

……

夢かうつゝかとハ實欤實ならさるかの心せ此界の生

ハ實欤否欤せ即空假中三諦せ爰ハ空諦うつゝハ

假一兩篇亡したるハ中道せ

37オ（「むら鳥の立にしわか名　ことなしふとも」の注。

朱筆38ウ参照）

御師説　事なし　兩説事なしせ事なしに

いふともしるしあらじせ

（「しるといへハ枕たにせて」の注）

……

御師説　ねじ物をすむせ

45オ（「かすゝに思おもハす」の注）

御師説ありきす　ありきする也

46ウ（「いて人ハことのミそよき」の注）

……

御師説　色ごとハ　別してせ

49ウ（「ちゝの色にうつろふめと」の注）

御師説　らめと　心し秋ハ　わか心せ

50オ（「あまのすむ里のしるへに」の注）

御師説　うらミんハあまのよせせ　われハとが

52オなき間恨られましきせ

（「おもひいてゝ戀しき時ハ」の注）

御師説　思ひ出て別而おもひ出てせ序哥せ

鳴てわたるハその人のあたりへ行ての心せ

53オよるか

（「まてといはゝねてもゆかなん」の注）

御師説　たなパし

55オ（「花すゝき我こそしたに」の注）

御師説おもひしが　かもがせ

58ウ（「あかつきの鴫のはねかき」の注）

御師説われそかすかくハ　われかかきつぎたるせ

百羽かぎ

57ウ （「夢にたにあふ事かたく」の注）
私けんげい
68オ （「あまのかるもにすむ虫の」の注）
私　いなば
71オ （「時雨つゝもみつるよりも」の注）
御師説　もミづる
75オ （「夢とこそいふへかりけれ」の注）
御師説　空假中すかたをあらハすハかりもの
なれは假ニあたれり中ハ法生の所をさし
て也　本來は皆夢也あらはれたるもの皆
夢也
90オ （「古のしつのをたまき」の注）
御師説　四河入海同一甘味　唐ニ名川もあり
又にごりたる川もアレトもそれも海へ入てハ同
ト也
91オ （「おほあらきの杜の下草」の注）
御師説おほあらきの　又すミても
93オ （「とゝめあへすむへもとしとハ」の注）
御師説　年ハ敏也はやき心也……
96オ （「わたつうミのなきつしほあひに」の注）
御師説わたつうミ
96ウ （「わたつうミのかさしにさせる」の注）
御師説　海童子（ワタツウミ）（ワタツウミ）朱・墨点ハ或ルハ字音ノ声調ヲ示スカ？）
98ウ （「みやこまてひゝきかよへる」の注）
御師説波のをすげてハ　波を緒にして也
105オ （「いかならんいはほの中に」の注）
御師説ハかハとにこる時ハ下ノハゝ捨て見へし
107ウ 左近將監とけて　をのゝはる風　寛平二年
年任右少將
御師説とけて　官をはかるゝ事也
112オ （「いさこゝに我世ハへなむ」の注）
……

裏説云……
……
……神代ハ大道也人の世となり
て仁義五常出來れり　大道廢れて
仁義興人之理也　仁義も又すたれて人と
失正成邪之故ニ日神此時和光同塵し
給て邪立正之德をほとこしまし
すこれによりて罰あり利生あり大道
之時ハ此義あるへからす……
（112ウ）
113オ （「我いほハ三わの山もと」の注）
……（裏云）……
又人々此三毒のあつまる処ハ四大五蓋也……
115ウ （「風のうへにありかさためぬ」の注）
……
裏云風の上の塵とハ風大地大也　塵ハ土也
水火ハ風と地とに屬す　人身ノ五大所成之
さま也　人身ハ風にもたれて輕き物也
……
116オ
……
御抄云……
……
116ウ 今世後世共ニ身上をはかる哥也尤肝心とそ
神道をあふけハ王法全し世間をなけゝハ
仏法あらハるゝ
……
117ウ 寛平御時　もろこしのはう官　遣唐使
118オ 大使一人副使二人判官四人
御師説ハう官　公家よりの
遣唐ハ大使と云禪家よりノヲ眞使と云ハう官
常四人遣唐使ニそふなり
120オ （「あしたつのひとりおくれて」の注）
御師説つかなん　つけよ也

122オ
（「もえつゝとは」の注）
御師説　かぐなわ　ねぬなはのたくひ也

128オ
（「涙の色の紅ハ」の注）
御師説　われらか中　つかへ申人に皆時雨ふる
ト也主人はてたる故也　ひと〳〵

129オ
（「ちわたすをちかた人に物申すわれ」の注）
御師説われそのそこをのけてもいはるゝをかし
らにならふといへりそれをかへるといへり

131ウ (1299)
梅花見にこそきつれ　ひとく〳〵とハ鶯のとびなき
の聲を聞なしたる也　……

132オ
いつしかとまたく心を　またく心ハ　待心也　跨ぐる
心をよそへてよめり　脛にかきあげてさしま
たけてわたらんと也　……

134ウ
（「冬なから春の隣の」の注）
……
裏云……
……　政道にも比類あ
るへし　……

135オ
（「枕よりあとより戀の」の注）
……　裏云枕ハ上跡ハ下也
善惡にとる　欲心に貪して善惡をわ
かぬ事を風する也　……

136オ
（「みゝなしの山の口なし」の注）
……
耳にきかす　言云かハす事なき事を
心地に深く染たくハ戀のうくつらき事も
あるましきと也
裏云大人ハ耳に聞と人の語をもて惡事
となる事あり　……

137オ (1369)
（「秋のゝにつまなき鹿の」の注）
御師説なそとわひてそと又あるふしん　なそ
わか戀のかひよとそハ鹿の如此なきてとを

142オ
りたるトはかり見へし
（「さかしらに夏ハ人まね」の注）
御師説　一間にぬるよき也　夏ハ一人ねてもく
るしからぬか冬さゝのさや〳〵にひとりね
かねての哥也　やもめの哥なるへし

143オ
（「雲はれぬあさまの山の」の注）
御師説　みてこそ

146オ
（「身ハすてつ心をたにも」の注）
……
裏義同心の放埒を制する也
五大分散すとも心ハ金剛正躰ノ所を思へし

146ウ
（「白雲のともに我身ハ」の注）
……
裏云五大之身ハ假に古行とも心ハ不消之
由也此理ハ心に落たる說也　只當一念〳〵
花に對し月に向ふも心境共に亡したる
ハ虛无自然之心也　……
託其根於心地　根とハ根元也　心地とハ心底心の
はたへ也　……

補
上67ウ
俗人とハ世の人也　……
俗人爭事榮利不用誠和尊

上75ウ
序曰先師柿本大夫云々　……

中1オ
典侍洛子――　小書に寛平延喜掌侍典侍糸
所別當云々　掌侍にてありしか後に典侍に
轉じたるにや

中35オ
（「おなしえをわきて木葉の」の注）
御師説　綾綺殿　大内裏にアル御殿也
源の右近ケ將さね　實公　嵯峨才五御子明　大納言贈正一位
之孫也舒之二男也

中70オ (359)
（「此三の哥ハ」の注）
神明の衆生に同塵もをろかなるに同し給也

中105オ
（「秋のゝにつまなき鹿の」の注）

下92ウ

【巻二十聞書　翻字】

十月三日

古今和哥集巻才二十　卅二首

此巻ハ一段有子細也　十九巻雑躰も余集に
ハかはれり　殊此巻ハ王道神道を兼て
あミたる也　此巻を天眞と用也
一京極黄門云姫公之籍孔父之書ハ与日月俱
懸鬼神爭與文選短虞非所及云々
文選注日明如日月深如鬼神云々　此巻の心也
一上ニ賀ア あれともまさしく君を祝ふ心ハ
此巻也其故ハ天照御神より天の日つきを
うけ給て御即位之後新年之米穀をもて
てつからミつから天神地祇をまつらせ
給大嘗會の事あり君の祝言不可過之也
神樂事ハ天照御神岩戸を出ましましし時
の神樂是也神樂ハ天下安全を祈給し事也
又わ道の肝心也仍王道神道ハ天眞独
朗也是をしるハ又和哥之德也

「十月三日」「卅二首」朱筆。

51オ

大哥所御哥　私オホシウ　此所ハ大内ニあり　御字ハ貫之
うやまふ義にて加たる也大哥所ハ立小路ハ西
の壬生の東也南ハ皇嘉門北ハ安嘉門のとほ
り也　横小路ハ西土御門の南　東ハ上東門
西ハ上西門のとをり也圖書寮の東にあた
りて方一町也南北に門あり云々大哥所
別當ハ親王以下納言等補之ニ
大嘗會新嘗會等々舞妓のまハる時大哥之
人發スモノ物音ニ云々此所ハ諸國之風俗神樂催
馬樂一切哥曲をつかさとる所也云々
又大哥ハ大和國の心あり　大哥ハ大和也所ハ
國也諸國の風俗等の事此巻にあれハなり
御師說おほなほひを　うやまふ故御ノ字

「オウタトコロノ」朱。

51ウ

入たるへしおほなほひ火神の名と心得たるよし
一說節會之時群臣内裏に祗候の日をいふ、
と云々宿直の心なるへし　大直日也
又云大直日ハ直なる心也　又神の御名に大直
の神と申あり其心同

天照太神の御心をまなひうつす天子の御心
も直を本とす是をおほなほひと云也
群臣の君をあかめ奉るも又君の直を
うつす心也即わか國治世之本也

あたらしき年のはしめに
一說此哥ハ聖武天皇天平十四年正月十六日女踏
哥ニ出御大安殿舞妓御覽之時大哥人彈
琴歌此哥也云々故号大直日哥云々
あたらしき年とハ御代始をいへり　新年踏
哥の哥にやしかれとも御代の始と用ける
より千年のハしめと云心也されハ聖武御即
位より天平十四年まてハ治世十九年なれとも
ハしめとよめる也一說ためしきをつめとハ正月
十五日百官官内省へ御薪を奉る事を
よそへてたのしミをつむ事をよめり云々
かくしこそとハ今をいふ詞也かくこそその心也
千年をかねてとハ今より後末の千とせを
かねて也群臣君の直をうけて私なき心也
日本紀にハ　續日本紀にありと云々可引見

ふるきやまとまひのうた
大和國より出たる舞也國の風俗也　延喜以
前のなれハ古きと云也　和州のなれハかつら
きをよめり　たとへハ駿河より出たるをする

「ミカマキ」朱。

53オ

「オウアトノ」「タイアン」朱。

52ウ

52オ

か舞といふかことし　大嘗會　春日祭諸社
祭等ニ用ヰ
しもとゆふかつらき山に　しもといふハかつらきといふ、
枕言也　しもとハ木枝薪なとも

戀哥也
裏說云まなく時なく――群臣思君之心也
君も又如此あるへきやうに德をおほしめすへ
きよし也
あふミふり　近江國よりうたひ出たる哥也
ふりハ曲也哥の事也國の風俗民の口つから
うたひいたす也
あふミよりあさたちくれハ　旅人なとの夜深く出
たる時のさま也朝立といふも夜ふかき時分
なるへし　羈中眺望もあり
裏云前の哥ハ百姓の君を思ふ心也
此哥ハ百姓の君に足手をはこふ心也又
民姓ニかきらす臣下等も同かるへしたつ
のこゑハ鶏人の唱をかたとる也
みつくきふり　前ハ一國之風也　是ハ一鄕の風也
ミつくきのをかのやかたに　ふりはも
不里波毛　私　或說　片傳　夫婦ねたる朝に
霜のおもしろきをあはれむ心也おりにより
て物ことに感ある也　ふりはとハふりさま
ハいかになといふ心ありわかさかりハもとよ
めるにや

裏云君を思へハ必德を蒙か故に家もとあり
夫婦のかたらひの道もたかハすさていもせの
かたらひふかき人も朝におきて寒夜にも
おこたらぬ民のくるしミをいかにと上より
思やるへき道也富貴にして貧賤を忘へ

53ウ

54オ

「不里波毛」の合点・傍線、朱。「私」「片傳」「或說」「フリワモ」朱。
「ワ」朱。

からさる風也
しはつ山ふり　しはつ山　近江名所云々一說
豐前ノ　しはつ山とも　是も一鄕の風也
しはつ山うち出てミれハ　万葉に入こや　はの字
清濁兩說云々彼眺望おもしろきさま也
笠ゆひといふによせてかくるゝとよめり
たなゝし小舟ハちひさき舟也
裏云うち出てミれハといふに觀心の心あり
笠ハ身をかくすへき心也　小舟ハ德のすく
なきたとへも　君に仕る身も浪のしは
をたゝむ計老ぬれハ德すくなく用なき
時必退てミをかくすへき事也　さて身を
隱すにつきても猶恩波にうかふ理を思
へし深山の巖の中も同しかるへし是仕君ニ
之人の道也　君恩無不到之故也　此理を
そむかハ道にたかふへし
以上四首身躰一期之間の事也君に仕る
より身退までの事を風する也
諸國の風俗を都にしてうたふ心王道の肝
心也民の口つから出たるを大哥所に哥ふ事
是君子の御心也　異朝に采詞之官國
風をあつむる同し心也　うたひあへる事又
殊勝之理也音律をもて其國の治乱を
しる世を治るハかりこと也
に大哥所哥を此卷ニ爲最初也　肝要事なる故
神あそひのうた　神樂の哥也　神遊ハ神の自
在なると云心也　又有口決ノ〻
とりもの〻哥　神樂の中のとり物の哥也
神に手向る物を神樂男の手にとりて舞
事ありし也
神かきのミむろの山の　榊とり物也
ミむろの山　大和國の名所にあらす　ミむ

54ウ

「ブ」朱。声点朱（平カ）、声点朱（上濁）。

55オ

「カク」朱。

合点朱。

55ウ

合点朱。

ろとハ社頭事也社頭の山の心也　和州のミむろ
山にも神社あり　それを神かきのミむろ
の山ともよめるあり　哥心ハ　社頭のさま
神木物ふかき躰也　感ありとゝ　神社
の山森にたる躰也
霜やたひをけとかれせぬ　八度ハ數多也しけ
くをく心也　たちさかふるとハ榊の霜にいた
ますさかふる心　きねを祝ふ心也　きねとハ神に
つかふる人也　かもとハ哉の心也　神德を思ふ
心也
裏云榊の霜雪にたへたるを喩る也人の
物に堪忍之性ハ出身のハえ也短慮なれハ
よろこひをもいたつらになすも也
御師説霜ハ曉の一天の陽氣をうけてふる
物也きねか神德にてさかへんとこちより云也
まきもくのあなしの山の　此事未分明ゝゝ葛
とり物也此山の社頭の神事の時

一説彼山神社の神事の時あなし山ハ風ハけ
しき処なれハ山人頭を葛にて卷て風を
ふせく事あり興ある躰なれハ神樂の時のひ
かけ冠にかけたる躰をその山人のさまとみえぬ
へしとも也ひかけハこけの事也かつらのたくひも
清き物也　又曉の雲を山かつらといふ事あり
深山にハあられふるらし　面白く殊勝なる哥とそ
公任卿九品之中上品中生入之也
裏云人の心奥に惡心あるハ必外に其色
あらハるゝも　はつへき事也ゝゝ　天道の鑑
のミならす人の間にも如此也
又天子治世之心遠遠まてをもハかりしろし
めすへき義也

56オ　56ウ　57オ

「カヽミル」朱、「レウエンこ」朱、

私遼遠ハはるかに遠き心也
みちのくのあたちのまゆミ　あたちのまゆミハ
樹なるへし然而已によめる也　戀哥也
すゑさへとハ　後さへより來よとも也行末かけて也
裏云一切の事始終あり思立処堅固なら
てハ成就しかたき也又中道にしてやむも
不成就也いつれをもかたくすへき也忍ゝ
には堪忍の心也　すゑさへよりことは學る
道の身にいたるへき心也
わか門のいた井の清水　杓とり物也　水を汲
とよめる杓の心也　心ハさひしきさまも
裏云水ハ人に汲るゝハをたやかならぬ我門
とハ浮生の境界を放たる処也　里遠ミとハ
去紫陌紅塵之心也水を心中にたとへたり
隱遁して無事なるさまも　人しくまぬ
とは善惡にあつからぬ心也　私紅塵あつきちりも
水草生とハ德のあらはれぬさまも　德とみ
ゆるハ不德之理也　無事の境をよめり
莊子曰才全而德不形　停水にたとへたり
ひるめのうた　日神の御名也　神樂哥也　大ひるめ
とも申
さゝのくまひのくま川に
神樂に日神を勸請し奉てあかり給をし
たふ心の哥也駒ハ神のめす物也万葉にハさ
いのくまとあり戀の哥にや　おもてにきこ
えねハ顯す此卷にてハ此心用也　又神樂の
本哥にいかハかりよきわさしてか天照やひる
めの神をしハしとゝめんゝとおなし心也　日神
をしたふとハ正直をしたふ心也我心を御神の
御心とひとしくとしたふ心あるへし
以上四種のとり物榊ハ色不變也不變なる
へきかたとり也葛ハ物に託して可勝事

57ウ　58オ　58ウ

この行の「ヒシャク」朱、「私」朱、合点朱、

あり弓ハ人ニしたかふ物也　したかふ道あるへき也
杖ハたもつ物也心ニ憶持する事のかたとり也
此四をまほるへしとそ
かへしものゝ哥　呂の律にうつる時の哥云々
未分明　おりかへしうたふ事あり其事にや
とノヘ
春哥に鶯の笠にぬふてふの哥の心同梅
あをやきをかたいとによりて
柳邊ニ鶯の鳴さま面白作也
まかねふくきひの中山　吉備國ニ鉄を堀て吹処也
帯にせるとハほそき川の帯ににたる也
春のさやけさとハ清字也
心ハ深谷まても君恩のいたらぬ方なき心也
代をほめたる哥也万葉にさやけさとよめる
哥みな物をほむる心なる多之
この哥ハ承和のゝ　仁明天皇大嘗會主
基哥也
つへとハにへ也　其國よりにへを奉る時の
哥也
きひの國とハ備中也　もとハ号吉備也後ニ
分之爲前中後也
御師説悠基かたの哥主紀かたの哥とて
あり悠基ハ左主紀ハ右也大嘗會ノ時國ニ
左ニつく右ニつくといひて其國よりけきやうする也

補入を示す線、朱。
59オ
「スキ」の「ス」、朱。
声点朱（上濁）・「ニヱ」朱。
「ユキ」「スキ」朱。
59ウ
声点朱（上）、

陽成ゝ　悠紀方哥也
君か代ハかきりもあらし　明也　長濱伊勢名所也
光孝　悠紀方哥也
あふミのやかくミの山を　のやハやすめ字也
たてたれハとは哥のよせせつきたてたる
やうの心也今たつるにハあらす　これハ今上
の　延喜御時　悠紀方哥也
當代の事なれハ賞して作者をあらハ
せり　私今上
此廿卷にも上立ハかならすなしとみえたり
あつま哥　東國の惣名也　あつまふりの心也
神樂哥國ふり等相交り此卷のさまも
みちのく哥　一國の風也
あふくまにきりたちくもり　霧たちわたりとも
戀哥也　あふくまハ逢心也　明かたに霧のふる
さまも　まてハすへなしとハいつともなき人
をまつハかなしきにとしたふ心也
みちのくハいつくハあれと　此國にも名所おほしと
いへとも此浦を愛する心也　かなしもハ愛
したる也　霧をかなしふといへる詞におな
し　万葉に此詞多之
わかせこを宮こにやりて　まつそ戀しきとハ
まちとをなれハ猶戀しきよし也松によせたり
おくろさきミづのこしまの　面白き所也　人ならハ
さそハんする物をとも
みさふらひみかさと申せ　宮木野ハ陰ふかき
処にて霧深き心也　みさふらひハ侍臣也
宮城野ハ宮禁の心にてよめり此卷にてハ
名所勿論也
もかミ川のほれハくたる　出羽名所也　むかしハ
陸奥なりし也水の早き川にてのほる舟

補入を示す線、朱。
60オ
60ウ
声点朱（全濁の和し）、
61オ

の浪にさへられて船のかしらをふるやうなる
をいなといふにたれハかくいふせ　序哥也
戀哥也
いなにハあらすゝ此月とハいつにてもいか
さまゆくすゑにハなといふ心也
君をゝきてあたし心を　こえかたき浪もこえん
とちかふ心也松山波の事ハ此哥よりハしまる
にやゝ
或説云以上七首ハ融公の家にちかの浦う
つされし時その名所〳〵を詠也云々いかさま
にも風俗にてうたふ哥なるへし
さかミうた　哥とハふりと云に同
こよろきのいそたちならし　めさしハ和布なと
を入る器云々又海人のをとめの事云々こゝに
ハ用之　めさしをもつ故に号するとも云へり
哥心ハいやしき人のわさをも思やる心也
あはれむ性也　使民以時といへる心も通す
へし
つくはねのこのもかのもの　明也此方彼方也
木の陰しけき山也
つくハねのみねのもみちは　木しけき山のさま也
落葉の名をしるもしらぬもみな愛する心也
裏云君子之心ハ怨親平等なるへき也
かひかねをさやにもみしか　見てしかなの心也
かひかねの面白をさやかにミんの心也
けゝれなく　心なく也　五音也　よこほりふ
せる　横り臥也　見御抄
かひかねをねこし山こし　嶺をこし山を越と
重たる也　人にもかもや　風を人にてもあ
れかしことつけやらんとも　思ふ人なとの方
へことつてしたき心也
裏云君恩のありかたき事を遠く告たき

62ウ　声点未（上なら人）　62オ　61ウ

よし也　おのつからいたるへけれともはやくつけ
はやの心也
いせうた　これも東海道なれハ東哥に入にや
おふのうらにかたえさしおほひ　戀哥也　實なく
ともまつねてかたらハん也
裏云ねてかたらハんとハ和する心也　其事
成も不成も人にハ先可和也　和する不和事
ありともの心也　又和光同塵の心も如此なる
へしとそ
此廿卷ハ王道神道也然而戀旅眺望名
所等表裏さま〳〵也其心一途ならす是
天眞にして難測之理也
冬のかもものまつりの哥　臨時祭哥也　宇多
御門御時はしめて行れし時敏行朝臣よ
める也
臨時祭事　宇多御門いまた王侍從と
中時陽成宇　賀茂に遊ましましけるに神託の
事あり後に東宮にたち給へり奇瑞奇
特也仍覚平元年十一月廿一日己酉日始臨
時祭を行ハる使ハ左近中將藤時平也
舞人十人東遊ありき
ちハやふるかもの社の
此哥を軸に入事王道德此奇瑞にすくへ
からさる故也　又延喜御時の集なれハちゝ御
門の喜瑞事を軸とする也　此集の卷頭
のことく軸の哥も又大道なるへしやすら
かなる躰也
敏行名をあらハすも一段之義也　此哥剌
殊勝之作也云々貫之所爲又奇特也とそ
万代ふともゝ　松によせて君德をほめ
奉る也
御師説賀茂ハ山城なれハ如此欤

64オ　63ウ　63オ

家々稱證本之本――
難捨之心にて奥ニ書置るゝ也書入てけす
事黄門の心にあはさる故にや　私以墨
墨ニテケシタル分ヲコヽニアツメテ書たる也
杣人ハ宮木ひくらし　杣人のこゑに山ひこのこ
たふる心也
御師説時鳥の下ニアリ　空蟬のカミニアリといへ
るハ物名の所ニ時鳥とうつせミの哥の間ニ此
哥けしてありしも墨けしハ定家の筆也
かけりても何をか玉の　たとへよミかへりても何を
かミんの心也
くれのをも　草の名也ノヽ　未分明
こし時と戀つゝをれハ　いつも此夕來し人と
まつさま也
おきの井　都嶋　名所也
おきのゐて身をやくよりも　都嶋邊のとよ
めれハ物名ニ隱たる処なし都を別しと
今又此嶋へを立別るゝとのかなしき心也
句をきりてよむとノヽ
そめとの　あハた　左の注にミヤ
うきめをハよそめとのミそ　雲の泡のことく
なる也　私あハたつあをくたつ心
けふ人をこふる心ハ　切に戀しく思ふ心ハ　大井
川の水のたきりたるにもをとらさる由也
わきもこに相坂山の　忍戀の心也
いぬかミのとこの山なる　此哥の外ニハ近江ニ名
取川みえすとノヽ　万葉にハ　いさや川
いさら川とあり
あめのみかと　天智天皇御事也
返し
山しなのをとはの瀧の　此哥戀ドニありこゝ
にてハ御返しの哥の心をあらはさんため

65オ　64ウ

に入たるにや
わかせこか　前にあり　御門を戀奉るとハ
允恭之御事也
道しらハ　無義
奥書
此集家々ニ本々不同之事也
旦任師説又加了見難計之故旦任師説
師説ハ基俊俊成兩人説也　加了見とハ
春霞たゝるやいつこを　たてるやと改
たる　僧聖寶ニ正字をかゝるゝ等の事也
爲備後學――　七十歳計にして書給へ
るにや
近代僻案――　世ニある本の事也　書損
之事なくてかなハぬ事也
いさ櫻ひとさかりを　いとさかりと書たるに
付て種々説を設く事等也
但如此之用捨――　此辞肝心也　古今一卜之
心也和して不爭之性なるへし此集之眼
目之理也云々
貞應二年――　傳于嫡孫　傳爲氏也
是爲二条家支證規模也
爲氏ハ此年誕生也　祝言の心ありしにや但
又嫡々ニ傳へしの心にやノヽ

以上六度欠

67オ　66ウ　66オ　65ウ

「奥書」朱、